

掲載者の

声

ただ捨てるだけではない、要らないものを活かす

有賀 暁子

身の回りの整理整頓をする中で、今まではただ捨てていた。元々掃除や片付けが好きな性分ゆえ、常に周りをキレイに保って生活することが気持ちいい。

最近ネットのフリーマーケット《メルカリ》にトライしてみた。自分では使わないけれど、捨てるにはもったいないという物を出品し、それを欲しいという人に買ってもらうシステムだ。

捨てるのは簡単だが、欲しいという人に使ってもらえれば、エコにもなり、物も再び活きる。

確かに出品までの手間は少々要するが、必要な人の元に届いて喜んでもらえることを想像すると、自分も嬉しい。ただ捨てるだけでは生まれなかった、人の役に立ってような清々しい感覚。整理整頓でスッキリした空間とともに、心にも新たなゆとりが生まれる。

物は、その時々自分の状況、感情次第で価値が変わってくるように思う。ずっと大事にしていた思い出の品さえ、なんとなく手放してもいいなという気になったり、存在も忘れていた物が片付けをしていたら出てきて、急に必要な物になったり。

物と自分との関係性に注目するのも、自分の内面や環境を見つめ直すのに、いい機会だ。

(元NHKテレビ・ラジオ体操インストラクター)

私の字が下手な理由

井口 昭久

私は、現在、私立大学で講義をしている。時折学生たちにレポートを書かせる。近頃の学生は綺麗な字を書く。特別に偏差値の高い学生の集まりでも低い学生たちでもないが、一様に分かりやすい文字を書く。判読不明な文字を書く者はいない。

私の時代には稚拙な文字を書く子供が多かった。私は今でも自分の書いた文字の判読に苦労する。私が定年まで勤めていた国立大学の前の総長は、ある半島の田舎育ちであるが、彼の書く字も判読が難しかった。私たちはひらがなを上手に書けない。ひらがなを上手に書けないのは小学生の低学年の教育に問題があったのではないかと思っている。今の子供たちは小学校へ入学する前には字を書けるようになるようだ。私たちの時代には入学前にひらがなが書け

るような子供は天才だった。しかし私は学校へ入ってからでも文字の書き方を教わった記憶がない。

小学校は昭和20年代の初めで子供が量産されて何処にでも子供がいた。子供はみんな悪ガキで放っておくと何をしかすか分からない存在だった。子供はひたすら取り締まるべき対象であった。他人の子でも子供は愛すべき存在であると認識されるようになったのは最近のことである。

保育園はなかったので小学校へ入るまでの子供たちは放し飼いの状態であった。小学校の一年生が集団生活の始まりであった。クラスに50人以上はいたのではないかと思う。現在の大学生でも放置すると統制不可能になるのだから、野獣のように遊びまわっていたガキどもを机の前に座らせておくのは並大抵のことではなかったに違いない。

に子供は農作業の重要な担い手であった。勉強などは暇な時にするものだった。少年の世界は弱肉強食でいじめはしょっちゅうあった。勉強などすればたちまちいじめの対象になった。

私の世代がひらがなが上手く書けないのは、その辺りに原因があるのではないかと、近頃思っている。

(名古屋大学名誉教授・愛知淑徳大学教授)



挿絵 茶畑

「東京長谷人会」の 総会・懇親会に参 加し、故郷を思う

伊藤 喜良

昨年6月に開かれました「東京長谷人会」総会に初めて出席しました。毎年この会の案内状をいただいていたのですが欠席していました。今回出席したのは、前回の伊那市「ふるさとだより」に、戦病死した父親の慰霊のために中国武昌を訪れたという小文を載せていただきましたが、それをお読みしていただきました「東京長谷人会」幹事の方がぜひ出席してくださいと、うにとの丁寧なお手紙をいただいたからです。出席してみると小中学時代の面々がそろっており、懐かしさがいっぱいでした。出席なされていた副市長さん、長谷総合支所長さんらと名刺も交換させていただきました。あまつさえ、挨拶の機会も与えられ思わぬ歓待を受けて、感激しました。

旧長谷村は美和村と伊那里

村が合併してできた村(合併したのはわたくしが大学に進学した以後)で、私は旧美和村非持山に生まれ、小学校1、2年生の時は非持山分校に通いました。そのころの分校は他に戸台分校がありました。非持山は旧三義村(のちに高遠町に合併)の小学校の方が近いような辺鄙な集落でした。3年生の時から5キロほど距離のある溝口の本校に夏も冬も皆歩いて通いましたが、寒風吹きすさぶ真冬は辛かったです。戦後、非持山分校の教育運営については、「へき地環境で限られた人達だけの交際で経験領域が狭く競争心にか

け集团的社會訓練ができない」(『美和小学校沿革誌』昭和51年6月刊)との分校教育の困難性が指摘されているような状況でありましたが、このような状態は、現在でも分校時代の同級生にとって、その当時を懐かしむ原風景であり、交流の上で大きな絆となつていきます。その後、溝口集落にある本校3年に編入したのですが、5キロの距離を通

い、「集团的社會訓練」ができていないわたくしたちは本校になれるのに苦労しました。村落名に「山」が付いていたので、「山猿」と見られていたが、担任の北島嘉代子先生(現在でも年賀状を交換しています)の包容力ある教育により、次第に本校の中に溶け込んでいきました。

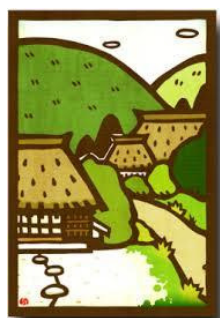
さて非持山集落の現状なのですが、私が分校に通っていたころは100軒以上の集落でありましたが、現在は半分以下になったのではと思われま

す。時が進むにつれてこの集落を離れる人が多く、空き家だらけで、居住している人たちもその多くは老人です。戦国時代以前から存在していたと思われる集落の中の日蓮宗の寺院も数年前から無住になつています。この寺の脇には滅亡した甲斐武田氏の大工頭池上氏(非持山に多い姓です)が逃げ延びてここに居を定めたとする関連資料もあり、歴史的にも注目していい寺です。このまま経過したならば、数十年後にこの集落は消滅する

のではとの危機感を持っています。

国道152号線にある非持の「道の駅」は賑わっているし、スーパー林道、分杭峠等の人氣で旧長谷は観光地のようになっており喜ばしい限りです。もう一つの分校であった戸台の集落はほとんど無くなりましたが、地名は南アルプスの登山口として有名になっています。さて私の故郷非持山はといえば、有名となることなどはまったくありえず、何とか村落の存続を願うのみです。非持山は山室川の下流域に存在していますが、この川の中流、上流域である旧三義村の集落も同様な状況であり、山室川で子供時代に遊んで過ごしたのとしては、何とか山室川流域の復活再生ができないものかと気をもんでいる次第です。

(福島大学名誉教授)



記憶の共有

伊藤 延司

妻八十歳、僕八十二歳。

認知症とまでは言わないけれど、互いに記憶力の衰えを感じ合っている。

「ゆうべ何を食べたっけ?」と、聞いたか聞かれたりする朝が増えた。昔のことはよく覚えていたのに、直近の出来事が記憶の引き出しに、すっかりスナリ、納まってくれないのだ。夫婦して、ボケの入口あたりをウロウロしている。そんな妻が先日、いきなり言った。

「昔、伊那町の警察から刑事さんが学校に来て、体操場(ば)で話をしたことがあったですよ」

伊那町警察の大層えらそうな人が、雨天体操場兼講堂の演壇から、窃盗犯を捕まえた話をしたことを、僕も鮮明に覚えている。でも、それが昭和何年ごろだったかは、はっきりと思いつけない。

妻がいう「伊那町の警察」は、

終戦直後に占領軍がアメリカの制度を、日本全国の市町村に持ち込んで作らせた「自治体警察」のことである。それが今の長野県警伊那警察署になったのは、伊那町が伊那市に昇格した昭和二十九年のことだから、伊那町警察の刑事の話聞いたのは、それより前、恐らく僕が中学三年、妻が一年のころだったろう。

妻と僕は、学年は二年違いだが、小中学校が同じだったから、少年時代の記憶はかなりの部分で共通している。だから、記憶力は衰えても、昔のことは、互いに呼び起こし合えるという、便利さはある。

「あの刑事さん、朝鮮人は年中トウガラシを食べている、と言ってたわね」

僕が覚えていたのも、そのことだった。警察官の階級について知識がなかったから、話をしに来たのが巡査部長だったか、警部だったかは言えないが、町の警察を代表して来たのだから、捜査を指揮する立場の上級警官だったのだろう。彼は「泥棒は盗んだあとに、ウンコウを

まっけていく」と言った。

「ウンコウをまっけていく」と

は、耳なれない方言だったが、泥棒は犯行の後に大便を残して行くという意味らしかった。その怪しくも臭い遺留物に、トウガラシが混じっていたことから、警察は犯人を朝鮮人と特定し、スピード逮捕できたという。つまりは手柄話だが、僕は耳ざわりの良くない方言と、ウンコウの話が漂わす朝鮮人に対する露骨な蔑視に、強い反感を覚えた。妻も同じ印象を受け、言葉から風貌まで、鮮明に覚えているのは、不快な思いが強かったせいだろう。

終戦直後の僕たちには、今でいう在日朝鮮人や韓国人に対する差別意識が、確かにあった。生徒たちの中には、刑事の手柄話に差別観を増幅させられた者もいたろうし、逆に僕のように、刑事の物言いに反感を抱いた者もいたと思う。

「あの話が、かえって朝鮮人への共感っていうか、差別観に反発する気持ちっていうか、そんなものを生むきっかけにな

った気がするね、僕は」

「私も、そんな気がする」

あれから何年か経って僕たちは結婚し、その間に在日朝鮮人の親友もできた。「そういえば、しばらくヨンジャに会っていないなあ」妻が呟いた。

記憶力が薄れてきた妻が、ふつと思いついた伊那町警察の刑事の話から、僕たちは日本人の朝鮮人観について語りはじめていた。親友の名前はチョン・ヨンジャ、漢字で「鄭榮子」と書く。僕たちが大学時代に知り合い、今でも年賀状の交換を続けている。

記憶の連鎖は、ヨンジャから「うた声」運動のことに及んだ。僕たちは「カチューシャ」や「ともしび」を唱いながら、記憶の引き出しを、あちらこちら開けて行った。記憶は列をなして出てくる。僕たちが少年時代からの記憶を共有しているからだろう。もし妻と僕が、互いに遠く離れた土地で別々に育って

いたら、共有できる記憶は夫婦になってからの、僅かなものだったろう。

僕たちの記憶は、二人の脳

に別々に納められているのではなく、ふるさとの土に根を生やしている。だから、二人で懐かしい風景を見ようように共有できるのだ。夫婦に限らない。同じ記憶を共有する者同士なら、誰でもいい。こうした記憶の共有関係が、ボケ防止に役立ってくれるのではないか。なんて、僕は勝手に期待している。

(翻訳家、AFP通信日本版サイト顧問)



伊藤三千人 「上高地」

伊那の良さを外国からの人々に

井口 武雄

地下鉄の座席でお化粧をする女性や街の中を歩きながらりんごをかじっている人を見かけるようになって久しくなります。かつてはお化粧は家

等他人に見られない所でした。いたのではないのでしょうか。子供の頃物を食べる時はきちんと座って食べなさいと親に言われたことを覚えています。

かなり前になります。イギリスのロンドンで半年ほど過ごしたことがあります。その時びっくりしたのは地下鉄の中や歩きながら人目も気にせずりんごをかじっている若い女性が一杯いたことでした。

今では日本の多くの人がヨーロッパ等の外国に気軽にしかけています。それは本当に素晴らしい習慣を壊してしまうことには賛成できません。

昨年日本を訪れた外国の人

が二四〇〇万人を超えたとの報道がありました。日本を外国の人々に直接見て理解してもらえないはずなので喜ばしいことです。

東京オリンピックの実現に日本の「おもてなし」が貢献しました。外国からの訪問者が増えたのもその影響かも知れません。

おもてなしは「思いやり」と「たしなみ」から生まれると信じています。外国の影響を受け易いと言われる日本人がこれを忘れて外国から来た人のマナーや習慣を真似するようになってはならないと思います。

これからは伊那にも多くの外国の人が訪れるでしょう。

二つのアルプスが聳え、真ん中を天竜川が流れ行く伊那は外国人も息をのむ美しさです。

伊那の人々が外国の人々のマナー等に染まってしまうのではなく、外国の人々が伊那の人々のたしなみと思いやりで感動しその感動を持ち帰ってもらうようにして欲しいと思います。訪問した人々が伊

那の良さに染まって帰っていただくことを楽しみにしております。

(三井住友海上火災保険株式会社
シニアアドバイザー)



太平洋戦争末期の 中学生生活

大羽 繁

今から七二年前、昭和二年四月から終戦の日の八月一日までの太平洋戦争末期の中学生生活の思い出を記しておきたいと思います。

(下宿生活)

私は昭和二〇年四月旧制伊那中学校に入学した。高遠の奥の山村旧美和村出身で、伊

那町に下宿することになり、毎週一週間分の米を持参し下宿先に預け食事の面倒を見てもらい朝下駄ばきで登校した。当時伊那町の舗装道路は通り町から伊那北駅手前までの約八〇〇メートル位だった。週末の土曜日営林署のトラックに乗せてもらい帰宅し、翌、日曜日材木を積んだトラックに乗せてもらい下宿先に戻る生活だった。

(勤労奉仕・開墾)

五月末頃から六月になると、勤労奉仕が義務づけられ、砂防工事や出征兵士の留守宅の田植えのお手伝いに行った。昼食に出してもらった白米のおにぎりのうまかったことを忘れられない。七月から八月にかけては報国農場の開墾作業に動員され、炎天下汗を流した。当時朝鮮から徴用された若い兵士が、同じように近くで開墾の作業をしていたが、空腹のため松の木の皮を剥いで中の柔らかい部分を口にしていたのが、ものすごく印象に残っている。上級生の三、四年生は、六道原の伊那飛行

場の造成工事に動員させられた。

(授業・学校生活)

勤労奉仕や開墾の合い間を縫って授業が行われたが、結構しっかりやった様に思う。漢文、物理、化学といった小学生時代にはなかった科目もあり中学生になったのだなと感じたりした。今考えると不思議なのは当時敵性語だった「英語」の授業があり *This is a pen* などと習ったことを思い出す。当時は入学と同時に剣道か柔道を選んでやるよう義務づけられたが、この方はあまりやった記憶がない。(原爆投下から終戦の翌日まで)

伊那町は空襲こそなかったが七月頃から毎晩のように上空をB二九が通過し、その都度「空襲警報」が発せられ防空壕に避難するようになった。八月六日広島に原爆投下、九日には長崎に投下され、新聞は新型爆弾と報道したが、被害の詳細はなかった。敗戦の色濃くなった時期だが「日本は神国だから最後には神風が

吹いて必ず勝利する」と信じていた軍国少年だった。八月十五日は一週間ばかりの短い夏休みの最終日で、昼に玉音放送があると知らされていたが、雑音ばかりで内容は全く聞き取れず、戦意高揚のための放送だと思った。何時もの様に伊那へ帰るため営林署の貯木場に行ったが、様子が変わっていて、材木の運搬は中止、車の運転も中止となっていた。たまたま戸台で炭焼きの任務に就いていた兵隊さんが居て「日本はどうも戦争に敗けたらしい」と教えられた。翌日から学校が始まるので、その日は母の実家のある栗町まで十三キロばかり歩いて泊めてもらい、翌日高遠からバスで伊那にたどり着いた。学校では何が起こったのか情報に錯綜して右往左往する一日だった。

(東京長谷人會相談役)



仙台で咲いたタカトオコヒガンザクラ

蟹澤 聰史

昨年四月、家人の友人から仙台でタカトオコヒガンザクラが見られるとの情報を頂いた。場所は宮城野区七北田川の川沿いにある高砂中学校。この付近は先の大震災で津波の被害を大きく被った。シンボルだった校庭の大きなサクラも塩害で枯れてしまった。快晴のある日、中学校を訪れたところ、校庭の一角に見事に咲いていた。なんと、情報を頂いた方ご夫妻と桜の前で全くの偶然の巡り合わせ。やはり、気になって開花を見に来られたとのことだった。突然だったが、せっかく来たのだからと、校長先生にお目にかかり、サクラの由来について詳しいお話をお聞きすることができた。素晴らしい資料室も拝見させて頂いた。

「被災された地域に何か支援活動が出来ないか」との話から始まったという。そして「大震災の津波で被害を被った高砂中学校に、伊那市高遠のシンボルであるサクラを贈りたい」という思いもよらない意見がでたとのこと。一方で「独りよがりでは？」「ありがた迷惑」などの意見もあったという。高砂中学校でも「根付くか心配」「世話をする人がいるだろうか」などの心配もでたらしい。しかし中学生たちは動いた。東部中学校生徒会では、高遠から門外不出のこの桜をなんとか高砂中に寄贈したいとの運動を起こし、対する高砂中学校でもそれに応えた。

震災の翌二〇一二年、ついにこのサクラ二本が贈られた。以来、両校の交流は続いているという。贈られた二本のサクラは「希望のあかりを灯し、未来へのみちを示す」思いを込めて「希望あかり」と「未来(みち)」と命名された。この三年の間に大きく成長し、たくさんの花を付けた。東部中学校は、私が六五年も前に学んだ手良中学校などが統合した学校だ。故郷の伊那と今住んでいる仙台を若人たちが結んでくれた素晴らしい話。

(東北大学名誉教授)



『JA上伊那』と『JA北つくば』は『姉妹JA』なんです

上岡 実弥子

私の実家は専業農家です。今は弟が跡を継いでおり、花(トルコギキョウ)・米を作っています。父の代から今に至るまで、JA(農業協同組合)さんに大変お世話になっております。

農家では、ある種の“業界用語”が飛び交います。例えば「選果場」「直売所」「出荷」「(ビニール)ハウス」「コンバイン」「カントリー(エレベーター)」「マルチ」「しろかき」等々。非農家の方が「いま会社」と言うのと同じ感覚で「いまハウス」と言います。

言葉というのは恐ろしい：家業をまったく手伝わなかった(すみません)役立たずな私ですが、これらの業界用語はキッチリ覚えて成長しました。

時は流れ、私がコンサルティング会社を起業して数年経った、平成18年頃のこと。人を通じて、茨城県農業協同組合中央会のUさんからご連絡いただきました。

「茨城県内でコーチングの研修をしてほしい。対象は『JA北つくば』の職員です」

そこで、私はUさんに「ぜひお請けしたいです！実は、私の実家は専業農家で、JA上伊那の組合員です」と、お伝えしました。

すると、Uさんは大変マメな方で、打合せに『JA上伊那』と『JA北つくば』を比較する資料を作って持ってきてくれたのです。そこには、2つのJAの組合員数、職員数、事業規模、等の数字が書かれていました。Uさん曰く、『JA上伊那』と『JA北つくば』は、非常によく似た事業規模ですね。

私はとても親しみを感じました。それから10年以上、JA北つくばで人材育成の仕事をして頂いています。“業界用語”が出ると「知ってる！」と嬉しくなります。



さて、昨年。JA北つくば
にうかがった時のこと。

「上岡先生！今度、JA上伊
那と姉妹JA協定を結ぶん
です」

「え？ホントですか！」

「はい。先日も伊那に視察に
行ってきました」

これを縁と言わずして何と
言おう…皆さま、『JA上伊
那JA北つくば』で検索してく
ださい。姉妹JA協定の記事
をご覧ください！

（株式会社キャリアウィット代表取
締役）

日本人の道徳の 手本とは

唐木 淨治

文科省は、「教育指導要
領」の全面改正に伴い、「道
徳教育をすすめる有識者の
会（代表世話人 上智大学名
誉教授渡部昇一氏）によって、
道徳教科書が全面改正され編
集・発行されました。

この中で、日本の次世代を
担う若者たちに贈る言葉が東
京NPO法人から発行され国
立青少年教育振興機構の青少
年健全育成キャンペーンによ
って、「伸びよう伸ばそう青少
年」のパネルが全国の中学
校・小学校・幼稚園などに提
供されました。その主要なパ
ネルテーマは次のとおりであ
ります。

○いつまでも忘れてない感
謝（おも）と思いやり

○豊かな創造性を育む我が
恩師（おんし）と学校

○守り抜こう民族の尊厳・
義理（ぎり）・人情（にんじやう）

○いつも変わらぬ家族の絆
と家庭の温

○いつまでも学校・家庭・
地域の連携（れんけい）

○守ろう日本人の誠実（まこと）さ勤
勉（べん）さと正義（ぎぎ）

ところで、文科省の中央教
育審議会（中教審）において、
現行の教育基本法の全面改正
に伴い平成26年1月4日付の
朝日新聞によって、伊那小学
校においてはすでに通知表を
やめていたことが、大きくク
ローズアップされているので
付記します。それは特に大正
2年8月26日に中箕輪高等小
学校の生徒が中央アルプスの
西駒ヶ岳に登山をした際に遭
難死した事件のことを作家の
新田次郎の小説「聖職の碑」
（せいしよくのいしぶみ）に
おいて、大きく取り上げられ
たからだと言われております。

（NPO法人理事長・弁理士）



古町伝統文化を 守る友に感謝

唐澤 康二

伊那町古町四常会高砂町の
父の実家に東京の品川から強
制疎開により引揚げて来たの
は三才の時であった。今の中
央区秋葉町である。戦後の混
乱期も終わり新教育が始まり
一期生が我々である。「あれか
ら」「その時」を生き、あつと
言う間に喜寿を迎える年にな
った。毎年盆が近くなると小
学校（伊那東）の友より同級
会の報が届く。昨年は「高遠
さくらホテル」に集まった。

伊那在住の者と市外者半々位
お互いに一年が重くて速い。
透析をしながらも故郷の友に
会いたいのだろう、伊那の病
院に予約して出席した友もい
る。懐かしい顔もしわが増え
た。毎年会えば、話題は子供
時代の「藁草履」で通ったこ
と、字の練習には「石版にロ
ウ石」藁でつくられている半
紙「遊びは「下駄スケート」
等々自慢の手作り物、特に楽
しみにしていたのは古町公園

に夏巡業に来た「大相撲」天
童河原での「シバタサーカス」
興奮しながら観にいった。又
東大社の祭りに中学三年生中
心での手作り「神輿」や「天狗」
「おかめ」「ひよっとこ」の配
役決め、団長を中心に組織し
青年団の先輩より大人扱いさ
れ興味ある夜話や礼儀作法と
団体行動の注意等指導受け楽
しかった思い出となっている。

古町在住のN君の話によれ
ば老齢化が進み古町住民の大
半は六十五歳以上になり伝統
文化の継承は難しく、その中
で何とか古町公園の「さくら」
と子供育成会による「祭り」
は守っているとの事であった。
感謝と頑張っている皆さんに
敬意を表したい。

ボタン一つで遊びも、知り
たい情報も寸時に取れる昨今
では伝統文化の継承は難しい
今話題の「ふるさと納税」の
原点は伝統文化の下で育てら
れた故郷に礼を尽くす事だと思
う。次回納税の際は少額で
すが郷土の文化保存に納めた
い。

（株式会社アイプランニング代
表取締役）

日本の音を未来に

川村 利美

私は四〇年余り伊那と東京で箏（こと）の教室で教授しながら、演奏活動をして参りました。日本文化の一端ではありますが、多くの方々に和の音や音楽の素晴らしさを伝えられるよう日々励んでいます。

東京オリンピック、パラリンピックに向け日本文化を世界に発信すべく、各方面の動きが活発化してきて、喜ばしいことです。

私が平成元年に結成した「むつのを」と名付けた和楽器のグループは、「日本の音を未来に伝えたい」との思いを発信続け、和楽器のオーケストラへと発展し、オリンピックの前年に三〇周年をむかえます。地方公演、学校公演また教育の現場での助っ人として小学校から高校の音楽の授業のサポートもしています。私は東京の練馬区在住で、地元为学校は勿論ですが、伊

那市の人材登録されていることもあり、友好都市の新宿区の小学校にご縁が増えていきます。また、高遠高校の芸術コースの授業も受け持つことになりました。これからは伊那市の教育の場でもお役に立ちたいと考えています。

日本の音を未来に伝えることが私のライフワークになっています。

(箏曲演奏家)



女性登山家田部井 淳子さん

北原 巖男

1975年(昭和50年)の世界最高峰エベレスト(8848m)をはじめ、世界7大陸の最高峰のすべてを女性として初めて登頂された田部井淳子さん。生涯七十六カ国の最高峰に登頂されました。

2014年(平成26年)には、東ティモールの最高峰ラメラウ山(2963m)にも登られました。『東ティモールの山へ行くと言ったら、「えっ、危なくないの? 危険だよね、ゲリラが出るかも。第一、山なんてあるの?」と言う人がかなりいて、政情不安など、いい話は何もなかった』『実際に現地に行くことの大切さを実感した登山でした』『東ティモールのラメラウ山は私の七十一カ国目の最高峰になり、緑も多く、忘れ得ない国、山となった』と述懐されています。

今頃は、きつと七十七カ国目の最高峰目指して一步一步登っているのではないでしょう。

全く偉ぶるところなく、面倒見のいい笑顔と闘志の田部井淳子さんに元気をもらった人は多い。僕もその一人です。

◆「一番大切なものは、本当

に行くんだ、本当にやるんだ」という意志なんです」

◆「オタオタするな、現状を受け入れ一番いいと思うことをやれ」

◆「病気は生きてる証拠、病気になるっても病人にはならない」

◆「力尽きるまで自分のペースで楽しく突き進む」

ラメラウ山登頂後、田部井さんと歓談された東ティモールのグスマン首相(当時)は、次のようなメッセージを寄せています。

「私は、田部井さんご自身の情熱そして他の人々の内にある情熱に勇気を与えその情熱を引き出す力に感動致しました」。

(一般社団法人 日本東ティモール協会会長)



写真協力：女子登山クラブ

「戸台口」という新地名

—入野谷紀行 8—

北村 健治

地名を表す言葉には、自然や歴史的な意味を持つものが多く、一つの地名を紹介するために調べてみると、いろいろなことが分かってくるのである。それなりに面白いものである。またときには、新しい地名が生まれてくる機会にぶつかることもある。

「戸台」は、赤石山地の仙丈ヶ岳と東駒ヶ岳を源として西流する戸台川と、入笠山から釜無山・白岩岳・戸台川右岸の幕岩へ連なる2000m以上のいわゆる釜無尾根と、入笠山から鹿嶺高原へと連なる1700～1800mのゆるやかな尾根に挟まれて南流する小黒川とが、合流して西流し黒川となるあたり一帯を、いつの時代から「戸台」と呼ぶようになったのであろうか。この小黒川溪谷は18世紀末以来、赤石山地では貴重な「戸

台の化石」産地として知られることになった。

近代までこの地域に永く居住されていた人々は、高坂・大蔵・穴澤・竹澤の苗字を持つ歴史的な家族の皆さんであつたと聞いている。中でも大蔵姓の方々は、鎌倉時代以前に朝廷から許されて各地に木地師として栄えていった祖先をもつ末裔である。この長谷地区や大鹿村から移住した大蔵姓の子孫の皆さんが、伊那谷各地はもちろんのこと広く全国に分布している。また、この地域は三峰川上流地域とともに、第二次大戦前後から多量の巨木を伐採し搬出する森林資源の宝庫でもあったが、昭和34、36年の台風・集中豪雨などによる大災害が続き、多くの山間集落が大被害を受けて、先祖伝来の土地を離れる家族が多くなった。

一方昭和30〜40年代には、南アルプスの登山基地としての「戸台」を通過する山岳愛好者やアルピニストの入山者数は一時的に激増したが、広

域的に始まっていた中間山地の過疎化現象が止まることはなかった。小中学校の分教場まであった「戸台」も平成に入ると次第に集落を維持することができなくなり、平成18(2006)年には長谷村が40余年の歴史を閉じて伊那市に高遠町と共に合併した。また平成20(2008)年に南アルプス(中央構造線エリア)がジオパークに認定され、平成28(2016)年には二度目の再認定を受けた。「戸台」を含む南アルプス林道バス発着所や仙流荘を中心とする黒川沿いの一帯が、平成26(2014)年から新たに「戸台口」と呼称されることになった。平成27(2015)年に50周年を迎えた南アルプス国立公園は念願のユネスコに登録されて、南アルプスエコパークの入口となった、新地名「戸台口」は、南アルプスの北西の玄関口として、多方面からの皆様に記憶され愛され続けることでしょう。「戸台の化石」保存会は、毎年6月に三峰川石ころウォッチング、

8、10月に化石採集会を企画しています。

2017.01.05 TK 青梅にて。

(「戸台の化石」保存会名誉会長)



伊藤三千人「仙丈岳」



報道された地元紙

ゴルフとの出会い

木下 嘉隆

趣味はゴルフの「練習」である。芝生の上でプレイするより近所の練習場であれこれ考えながらボールを打つのが楽しい。何も取り柄の無い無趣味の仕事人間であつたのだが、六十歳を目前に随分と変わってしまった。

ゴルフは十年程前に社長の業務命令で仕方なく始めた。取敢えずゴルフ道具一式を購入したものの、ゴルフコースで一度もプレイすることなく一年以上が過ぎてしまった。そんな折、突然、社長の代理で台湾のパートナー企業が主催するゴルフコンペに参加する羽目になってしまった。慌てて、ゴルフの上手な人にゴルフコースに連れて行ってもらいルールやマナー含めて教えて貰った。とは言え、ゴルフは一夜漬けで何とかなるものではない。コンペ当日、大

変名誉なことに百名を越えるギャラリーの視線を浴びながら参加者を代表して最初のティーショットを私が打ったのだ。当然、見るも無残な結果で、最悪のゴルフコンペ・デビューとなってしまった。

帰国後、これではいけないと反省し、ゴルフスクールに真面目に通うことにした。百を切るまでは順調だったものの、その後、五、六年、スコアはほとんど伸びることは無かった。もう限界かなと半ば諦め掛けていた頃に、スクールの先生が新任の方に代わった。運動神経がかなり錆びてしまった私に変え品を変え、とても丁寧に熱心に指導してくださった。素人目線にあわせてもらったこととたくさんさんの疑問に答えてもらったことが練習の成果に繋がった。一年程すると、スコアに著しい変化が訪れ、八十台のスコアを何度も出せるようになった。新しい先生から自分に適した正しい練習のやり方を学



ぶことができたのだと思う。ゴルフを始めて十一年目、休日のゴルフの練習にかなり熱くなっている。家ではゴルフのためのストレッチ体操や筋トレまで日課としてやるようになった。

ゴルフの練習にはまったお陰で、健康な身体作りの生活習慣が定着した。長年の妻の健康管理もあり、人間ドックではメタボや成人病といった項目は満点に近い。健康でさえいけば年齢に関係なく、練習次第でゴルフは進化できると信じている。七十歳になっても二百五十ヤード超えのドライバーを打つのが夢である。(マイクロンメモリジャパン株式会社 代表取締役社長)

幼年期の遊び場

河野 實

わが家は戦時中に大阪からの引揚者である。しかしながら戦争が終わっても、父の実家のある東春近下殿島に住み着いてしまったのである。戦後、父は伊那には仕事がないので、復興した住友金属淀川製鋼所に戻った。それ以来、実家は二重所帯となり、伊那の実家は実質上母子家庭に陥って、母が四人の男の子を育てながら、兼業農家を子供たちと切り盛りしていた。

昭和二十三年四月に東春近小学校に入学し、同じ敷地内にあった同中学校を卒業したのは、三十二年三月だった。同年四月から薫ヶ丘の伊那北高校へ通った。

ここまでがボクの伊那の生活だった。たった十数年しか伊那人でなかったのだが、少年期を過ごした伊那は、七十五歳になっても完璧な故郷であり続ける。高校野球も、駅伝など都道府県の対抗スポー

ツなどは、長野県代表を必死に応援する。

ツギハギだらけのズボンや綿の出た半纏を着て、小学校に通っていた。誰も貧乏だとは思わなかった。子供のころの遊びは、実家の近くに堂庭という広場があり、その広場で棒ベースや缶蹴り、かくれんぼ、頭切りつこ斬首するのではなく、頭を手でタツチされたら負け、宝探しなど。冬はソリ滑りのメッカだった。

ここには下殿島の古寺・沖・砂田地区の墓に行く坂道があり、原を経て原新田や富県に牛車の通れる坂道もあった。だから、ソリだけでなく手づくりのスキー板でスキーもできた。

母に庭から「もう暗くなっているぞ。早く帰って来い」と、男言葉で威圧的に叫ばれるまで、真っ黒になって遊んでいた。最高の少年時代だった。

現代は、歩いていても、電車の中でも、家でも、スマホのオンパレード。それも年齢を選ばず、チクチクしている。

戸外で遊ぶ子供たちを全く見かけない。様変わりした世の中であるが、自分たちの少年時代が最高だったと皆が思っている。

(ノンフィクション作家)

※写真は、荒神様や馬頭観音など道祖神が見守る「堂庭」と呼ばれていた少年時代の遊び場。下殿島古寺の大坂の入り口。



伊那市とともに

笹本 正治

皆様お変わりございませんか。昨年私は定年一年前、長野県立歴史館長に転職しました。歴史館は千曲市ですので、距離的に伊那市と遠くなったのですが、近くなった面もあります。

昨年十月三十日には東京の新宿歴史博物館で「戦国時代の高遠」と題して講演してきました。これは新宿区と伊那市友好提携十周年記念特別展の「信州高遠藩 歴史と文化」の一環としての講演でした。皆様もご承知のように、新宿御苑一带は高遠藩主内藤家の下屋敷でした。その一部が新しい宿場「内藤新宿」となりましたので、新宿は高遠藩と深い関係にあるのです。そこで昭和六十一年（一九八六）七月十二日に、高遠町と新宿区は友好提携を結びました。それから両者は深い友好を育んできました。

平成十八年（二〇〇六）三月三十一日、高遠町は伊那市長谷村と合併して、現在の伊那市が発足しました。同年七月二日、旧高遠町との友好関係がさらに発展することを願ひ、新宿区と伊那市は友好提携を宣言しました。これを記念して新宿歴史博物館で特別展が開かれたのです。伊那市と新宿の友好がさらに発展するように、心を込めて講演してきました。

また、歴史館では昨年十二月十七日より、本年の二月二十六日まで、冬季展「信濃国の城と城下町―発掘調査が謎を解―」を開催しましたが、その中では高遠城の発掘成果も出、土管が展示されました。当然ただの土管ではありません。文化九年（一八二二）、城内に水を引くために焼かれた土管です。この土管を焼くための窯から高遠焼きが始まりました。

このように歴史を通じて高遠藩、さらには伊那市の紹介ができることを、大変ありがたく思っています。歴史家として引き続き伊那市を応援していきますので、今後ともよろしく願ひいたします。

（長野県立歴史館長



早春のウェットランドへ

白井 温紀

ロンドンから列車で北西へ4時間近く。イギリスの湖水地方(Lake District)は透明な美しさを湛えて広がっている。200年以上もの間、多くのアーティストや文人たちを魅了し続けるウェットランドだ。

ある年、まだ風の冷たい早春、湖水地方を旅した。林床に貴重種のブルーベルが可憐

な姿を見せる季節。スモモの花が咲き始め、スプリング・ラムたちにも出会えた旅だった。

イギリスは国全体がウェットランドのような土地柄で、中でも湖水地方は山と谷と湖が織りなす清涼感が素晴らしい。そして、その美しさをより印象深いものになっているのは、山の牧畜や、谷間の村、湖面を渡る風、水辺の家々だ。こうした、自然の風景が賢く維持されている土地では、庭は風景に向かって開かれ、土地の自然と一体化している。園芸種の数はいくつか、作り手の人格の強さを感じさせ、素晴らしい。

列車を降りてレンタカーを借り、素敵な景色に出会うたび車を停めて写真を撮った。羊飼いの仕事ぶりを見聞きし、聳える山に見惚れ、車は、次第に水辺へと近づく。そして私たちは、「水」の輝きに迎えられる。

湖水地方―イギリスの美しい自然だけでなく、建造物や農村の風景が、文化遺産と

して後世に伝えられている。有名なのは『ピーター・ラビット』で知られるポターの家「ヒル・トップ」と、彼女がナショナル・トラスト運動の創始者として遺した広大な土地。そして、ロマン派の詩人ワーズワスの愛らしい住まい「ダヴ・コテッジ」。さらには、人物の大きさを感ぜさせるジョン・ラスキンの「ブラント・ウッド」。ラスキンは、ウイリアム・モリスなど、時代の才能に慕われた思想家である。

どの住まいも、自国の風土への愛着に満ち、庭本来の価値や魅力を教えてくれる。それは、彼ら、イギリスの人々の言うところの「土地の精霊の声」に耳を澄ますということではないか。伊那市の自然は、どこか、この湖水地方に似ている。

（ガーデニングデザイナー）



伊那っていいな

鈴木 福

毎年のようにお正月には伊那スキーリゾートやアピタに遊びに行きましたが、今年は年始に東京国際フォーラムでの日本のお正月を楽しむイベントのナビゲーターをやらせて頂いたので、まだ伊那に行けてません。

2月には日生劇場ミュージカルに出演します。稽古場でも他のキャストの方の演技や歌に感動しながら頑張っています。5月には映画「猫忍」も公開されます。念願の忍者役です。

僕もいよいよ小学校を卒業し、4月から中学生になります。今まで頑張ってきた仕事はもちろん、大好きな野球も続けたいです。そして新しい事にも挑戦したいと思っています。分杭峠の気の里は赤ちゃんの時連れて行ってもらったのですが、僕にとっても良いパワースポットのような

ので今年は絶対に行きたいと思っています!!

昨年は新宿で開催された伊那物産展に家族で行きました。伊那の美味しいものを楽しみました!

毎日更新しているAmebaブログ「笑う門には福ブグ」でも伊那の素晴らしさを発信していきたいと思っています。今年も皆さんにたくさんのお届けできるように頑張ります!! 伊那っていいな。

(こどもタレント)



NHK 総合「超入門! 落語 THE MOVIE」
初天神の金坊役

何がみえる里山里地と「火山峠」 — 自然文化の拠点 —

田畑 貞壽

近年、辰野から天竜峡行きの電車で伊那まで出かけたとき、幸運にも何回か快晴に恵まれました。そこで車窓からの南アルプスの山並み、その手前の三峰、菅野高原、入笠山、月蔵山、不動峰、五郎山、高鳥谷山、戸倉山(伊那富士)三海山や、至る場所にある集落、そして、天竜川の水辺などふるさとの変わらない風景を楽しみながら伊那市駅に降り立ち、急いで伊那図書館に向かいました。この日は二〇〇九年に設置された「伊那谷自然環境ライブラリ」に持ち込んだ図書資料の整理が、主な用事でしたが、その仕事の間、車窓で眺めたふるさとの風景を思い出し、時代背景と共に自然の見方が変わっていることに気づきました。まだ幼いころは、今のようには車や自転車になかったのですから、山を歩いて峠を越えます。しかし、自動車や自転車社会

の今日は、舗装された地面を車で通るので全くと言っていいほど、自然に対する思いや、考え方が変わってくるのではないのでしょうか。

私たちが五感でとらえる自然や、風物、史跡、名勝地は年齢とともに関心の持ち方が違っています。そこで、幼い頃からよく歩いた峠越えの道歩きを思い出しました。伊那市図書館酒井館長さんに、「伊那市に関連する峠は杖突峠、分杭峠、火山峠、新山峠、北沢峠、権兵衛峠だったよね」と、尋ねながら、歩けるのは火山峠ぐらいではないかと思いい、出かけたのです。

歩いたのは、富県の南福地から「火山峠」を越えて、東伊那(駒ヶ根市)に至る道です。今ではほとんど車道の整備は進み、車やバイク利用の方にとっては快適なコースのようです。

子どもの時に歩いた道も所々あり、峠までの上り道をたどりながら、耕作放棄した棚田の一部、新たなそば畑、戦後に植林されたカラマツ林をぬけて、昔ながらの松、ク、コナラなどの雑木林の小

道を歩いてみたところ、林床の植物の変化に気づかれました。しかし、植物や野鳥などの生態系の話は別の機会に触れたいと思います。

自然と文化を基礎に里山集落が形成されているわけですが、この集落の成立と峠の関係は、歴史的にも深いかかわりがあります。峠は、里山とその暮らしの実態を知る場所(視点場)であり、古くは異文化の交差点でもありました。しかし、峠越えの道がすっかり整備された今日の車社会では、嘗ての峠の機能は失われているのではないか、と思っています。これからは地域の人々をはじめ、レジャーや観光、サイクリング、トレッキングなどで訪れる人々にも、峠がもつ機能的な意味を正しく伝えることができるようなしくみづくりがほしい、と火山峠を歩きながら深く感じた次第です。

それには、例えば、昔ながらの峠の茶屋もよいでしょうが、今目的には、それぞれ関係する地区のまずは、地域住民、児童生徒、行政や企業の関係者など、利用者の皆さん

で具体的なプランを話し合う機会が、その第一歩でしょう。例えば、地域や学校の図書室の一角に「身近な山や峠のライブラリ」を設けることなどはどうでしょう。子どもから大人まで、全員が考えて取り組むことが伊那の魅力をアップさせる秘訣なのではないでしょうか。

【参考資料】地域の暮らしに
関係する「福地の歴史」吉田
琢三(一九四一—一九九五
年)里山、里地と峠、火山峠
の歴史的解説あり。

(千葉大学名誉教授)



火山峠を中心にした里山里地の文化景観
(Google Earth より)

幕末史を再勉強中

中村 彰彦

一昨年冬、連載に五年半かった長編小説『戦国はるかなれど 堀尾吉晴の生涯』上下巻を光文社より出版、昨年は三月に『疾風に折れぬ花あり 信玄息女松姫の一生』をPHP研究所から出した。その前に実業之日本社文庫に収録してもらった『真田三代風雲録』上下巻も視野に入れると、かなり長い間戦国史の調査と研究に没頭していたことになる。

しかし、上記の作品群に私の持っている戦国時代に関する知識はすべて詰めこんでしまったという気分も動いた。となれば、久しぶりに幕末史の勉強にもどりたい。そう思っていたところに中日新聞（東京では東京新聞）から歴史ノンフィクション「幕末・明治の残照」の週に一回の連載依頼が来たので、今年の末まではこれを書きつづけるため幕末関係史料の再読みこみに打ちこむつもりでいる。

『島津久光公実紀』全三巻、

安藤英男『雲井龍雄全伝』などを約四半世紀ぶりに読み返すと、記憶していたのと異なる記述があらわれてびっくりすることが時々ある。記憶は風化しつつ変化する、という事実を実感させられる一瞬である。

そんな脳細胞を刺激するのに良いのは、やはり旅行だ。去年は都内のほか富山県高岡市、福島県会津若松市、群馬県沼田市、栃木県栃木市、愛知県名古屋市、島根県の隠岐島などに講演で招かれたが、今年は二月に沖縄、四月と十一月に熊本、六月に伊那市高遠町へゆくことになりそうだ。高遠行きは会津高校同窓会東京支部の皆さんと年に一回おこなっている旧会津藩ゆかりの地の歴史探訪の一環としてだが、個人的には、高遠町の最後の町長さんで保科正之公を敬愛しておられた伊東義人さんのお墓にお参りできることを喜んでいる。

(作家)

故郷の縁

―弓との出会い―

那須 弘平

最高裁判所を辞してまもなく、頼まれて「全日本学生弓道連盟」の会長を引き受けました。この団体は、学生弓道選手権大会など、学生弓道界の主要大会を主催する全国組織で、運営は専ら学生たちに委ねられています。会長は、大会における挨拶や表彰等の儀式的なことを行うだけですが、その延長線上の仕事として、社会人を含む弓道団体である全日本弓道連盟の役員も兼ねることになりました。さらに、私の場合、それだけでは飽き足らず、これを機に学生時代に親しんだ弓道を再開することを思い立ち、自宅近くの区営弓道場に入門し、高齢者なりの弓道を楽しむことを始めました。

弓については、少年時代から関心があり、数々の思い出もあります。小学生時代には、不要となった竹刀（しない）の竹片とタコ糸を使って半月弓を作って遊びました。矢は、枯れて固くなったススキの柄を使いしました。この即席の弓矢を手にして、家の周りの雀などを追い回したり、裏山に分け入って野兔を追いかけたりしましたが、そんな矢に当たるとのろまな小鳥や兎はいませんでした。それでも、矢を番えて目標めがけて射るという行為には、子供の狩猟本能を掻き立てる何かがありました。

もう一つ、近在の社寺や旧家の庭を利用した矢場で、片肌を脱いで弓を引く着物姿の射手たちの姿に何とも言えぬ凛々しさ、奥ゆかしさを感じて憧れたこともありました。鋭い弦音と同時に、的に音を立てながら次々に突き刺さる矢の確かな美しさ、そして、同じ的に当たる矢は全て平行に刺さるという当然のことでさえ、子供の目には新鮮に映り、時の経つのを忘れました。

これら故郷での原体験が影響したのでしょうか、東京の大学に進んだ後、同郷の学友

(弁護士・元最高裁判所判事)



アフリカゾウの密猟が地元民の生活を困窮させています

新村 洋子

アフリカゾウの象牙は現在、主に各国のテロ組織団の資金源として大量に密猟されています。そのためアフリカでは毎年およそ百人のレインジャーがテロ組織集団に殺害されています。被害は住民を巻き込み、騒乱状態を引き起こしています。そのためアフリカ各地では国立公園などの観光客が激減し、国の財政を窮地に追い込んでいます。

二〇一六年九月二十四日、十月五日、南アフリカ共和国のヨハネスブルグで第十七回ワシントン条約締結国会議が開催されましたが、ここでアフリカゾウの密猟禁止が大きな議題となりました。

アフリカゾウの密猟禁止については一九八九年ワシントン条約締結国会議により象牙の商取引が一切禁止と

なりゾウの密猟が激減しました。

ところが十年経った一九九九年日本一国にだけ輸入許可をとの申請を日本が出し、会議は喧々囂々の反対の中でこれが承認されました。これがきっかけで以後また密猟が横行しました。

昨年のワシントン条約締結国会議では各国が大きな象牙市場を持つ日本に国内市場の閉鎖を迫りました。

しかし日本政府側は応じることはありませんでした。

アメリカも中国も国内の象牙市場の閉鎖を宣言し日本だけが孤立した形になりました。日本政府の決断がアフリカゾウの命とアフリカでのレインジャーや住民の命を守ることになります。

私たち日本人全てが象牙の消費を止めるべきだと思います。

(写真家・絵本作家)

「大河ドラマ」への思い

西村 与志木

平成二十九年 大河ドラマ「おんな城主 直虎」が始まりました。この稿を皆さんがお読みのころには、主演の直虎役の柴咲コウさんも活躍し物語も佳境に入っていることでしょう。

NHKの放送の区切りは大抵、四月から翌年の三月までと役所や学校と同じです。大河ドラマは年のあらたまった一月から始まり、その年も押し迫った十二月に終わります。歳時記的な感覚も相まって、新しい大河ドラマが始まると今年も、またこの一年はどんな年になるだろうかという思いで見始め、いよいよ最終回を迎えるころとなると今年は自分にとってどんな年であったろうかという感慨にふけることになるのもいいのではないのでしょうか。

この大河ドラマの放送が始まったのは昭和三十八年（一

九六三年）四月から十二月ま

での「花の生涯」からです。

当時はテレビドラマも「電気紙芝居」と馬鹿にされ映画からは一段低く見られていました。テレビ放送が始まって十年。何とか映画に伍してテレビならでは大型ドラマを作れないかという思いで大河ドラマは始まりました。といって

も当時は「大河ドラマ」という番組名はなく、いわばニックネームのようなものでした。「大河ドラマ」というタイトルがテレビで正式に表示されたのは、平成八年（一九九六年）の第三十五作「秀吉」からです。この大河は私がプロ

デューサー（制作統括）を担当しました。NHKの看板番組の総責任者がプロデューサーなので、何とかヒットさせたいと必死で、テーマを何にするか、キャスティングをどうするかを考えました。その結果、昭和四十年（一九六五年）、大河ドラマ第三作として大ヒットした「太閤記」、昭和五十六年（一九八一年）の同じくヒットした「おんな太閤

記」に続く豊臣秀吉を主人公にした大河ドラマです。必勝のテーマといってもいいでしょう。主人公には皆もアツと驚く竹中直人さん（当時はモノマネ芸人という認識が多かった）、そして信長には渡哲也さんという布陣を敷きました。結果は平均視聴率が三十%を超え大成功の大河となりました。

長い間、伊那市を挙げて「保科正之公」の大河の実現を目指しています。これから大河ドラマは新しいテーマに挑戦していきます。大いに期待していきます。

（元NHKエグゼクティブ・プロデューサー）



テレビはジャズか？ 蛮勇か？

野溝 友也

かつて国立競技場に聖火が灯った日。僕は五十二年後の渋谷で迫り来る東京五輪に向けたキックオフ番組の中継を控えていた。SHIBUYA 109 前の交差点に特設コースを用意、オリンピック・パラリンピックの競技を道ゆく人たちに間近に見てもらおう。そんな想いの企画。僕の担当はリオ・パラリンピックで銅メダルを獲得した車椅子ラグビー。

全日本メンバー全員が揃い気合が入る。

昼の十二時に車の通行がストップ。十六メートル四方のハーフコートを設置。隣には五台の大型トレーラーを連結し、六十メートルの走り幅跳び用助走路。陸上コース、トランポリンなども次々と設置。中継用の機材設置、警備なども一気に準備が進む。交通規制から二時間後に放送がスタートする。時間との戦いだ。放送十五分前にはほぼ全ての

準備が整う：はずだった。だが音声の回線がこない。放送にのるための音声を優先し、スタッフ間のコミュニケーションをとるインカムが間に合っていない。どうやらこちらの声も中継車に届いていないようだ。制作進行のために用意されていたトランシーバーが唯一の専用回線となる。混乱した現場のやりとりが耳の奥で飛び交う。中継は始まった。腹を括った。シミュレーションの通り進めればいいと信じ、自分の精一杯をぶつける。

かつてテレビは「ジャズ」だと唱えた先人がいた。全てのスタッフのインプロヴィゼーション。一時間半の生中継を乗り切った。

企画が決まった当初から無謀だ、無理だという意見も耳にした。でも、そんな無茶なことができるのがテレビなのかもしれない。「蛮勇」こそこのメディアの本質じゃないか。斜陽産業、オワコンと呼ばれて久しいテレビ。だが、この仕事をしていてよかったとい

う充実感が心地よい疲労感とともにこみ上げてくる。撤収が進み、間もなく交通規制が解除される。そんな交差点の真ん中に寝っ転がってみた。やはり渋谷の空は狭い。だがテレビの可能性はまだまだ広い。

(テレビディレクター)



土手と輪転機

原 克

「イナマイ」。それは呪文だった。

まるで、小学校の図書館から借りた外国少年文学全集にでてくる、秘密の合い言葉のように。

イナマイ……もちろん、「伊那毎日新聞」の通称だ。

記事ではない。少年を魅了したのは、町内にある伊那毎の印刷所であった。

小沢川に沿って、木造建築が横にのびていた。小学校の校舎に似ているが、軒は低かった。南に面した木枠の窓は、夏場、大きく開いていたものだ。冷房などない時代である。川風をいっばいに吸おうというのだ。

土手から見下ろすと、開けはなれた窓越しに、所狭しと輪転機がならんでいた。

油で黒光りした、大きくて複雑な機械が、ガタガタとかわらだを震わせている。一台だけではない。窓際の印刷機から、いちばん奥の輪転機まで、何台もの機械たちが、一糸乱れず、拍子をあわせて動いている。ガチャガチャ、ボタンボタン。

それはみごとな輪舞だった。なかでも心奪われたのは、輪転機だ。長く鋭い爪でできた、大きな熊手のようなものを、何本もクルクル回転させ、

新聞紙をページごと、右から左へと反転させてゆく。

熊手が回転するたび、金属の爪が、窓からさしこむ夏の太陽光線を、律動的にはねかえす。

土手にしゃがんでのぞき込むと、奥まった陰影のなか、一定のリズムでもって、爪の先が、キラッキラッと、閃光のようにきらめいていた。何度も何度も。

風向きによって、インク溶剤の濃い匂いが、フツと鼻先をかすめる。これがまた嬉しかった。

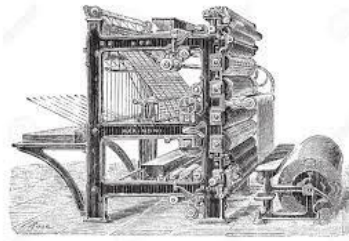
インクの匂いは、少年には、バスの排気ガスと同じで、どこかしら都会的で、モダンなものに感じられたからだ。

夏休みの昼下がり、草いきれに咽せながら、インクの匂いに包まれ、陰に走る閃光をみつめる。これが少年の至福のとき、イナマイであった。あれから五〇年、伊那毎の印刷所はとりこわされ、あとかたもない。だが、夏になると、いまでも、土手の草は風

にゆれている。

輪転機の熊手があくことなく回転していたように、土手の草は、あくことなく帰ってきてくれる。まるでニーチェの永劫回帰のごとく。

（早稲田大学教授）



ランチョンセミナー と伊那の商店街

平出 敦

第四十四回日本救急医学学会総会のランチョンセミナーの講師を依頼された。最初に伊那の通り町商店街の写真を救急医たちに見てもらおう。「これが長野県伊那市の商店街です。」

満員の聴衆が狐につままれ

たような顔をしている。

医療系の学会の学術集会では、ランチョンセミナーがつきもので、大きな製薬会社が自社から販売している薬をアピールするために、その筋の研究者の話を聞いてもらいその見返りに弁当を無料で提供するというのが定番である。ところが、今回は、伊那の製造業者が中心となり、信州メディカル産業振興会として長野県から補助金を得て信州大学と共同して開催にこぎつけたという異例のセミナーである。

晴れた青空のもとに伊那の通り町商店街がスクリーンに映し出される。伊那の風景は美しいが、かつての繁華街はシャッター街になっていることを説明。ここに集まった先生方の多くは、このような地域社会の救急医療を担っているのではないですか、と問かけると、聴衆がうなずいている。

そこで、すかさず伊那で生まれたサクラコマをまわす動画を映写する。小さなお土産

品ではあるが、地域の製造業の活性化のシンボルとして作成された一品である。そんな

伊那で、レスキューボイスという心肺蘇生の音声ガイドが、地域おこしの一環で製品化されたことを紹介した。これは、小学生などが携帯する防犯ベルに、救急蘇生の手順を説明する音声ガイドを装着したものであり、目の前で人が倒れた際にボタンを押せば、具体的に何をすればよいかを教えてくれる。医学的な視点からは信州大学の川岸久太郎先生の発案によるもので、音声は信州大学の学生が吹き込んだ。国産の質の高い製品として売り出そうという企画である。セミナーは異例だったが、多くの方々に関心を持っていた。近く発売されるレスキューボイスが全国で異例の売れかたをすることを夢見ている。

（医師・近畿大学教授）



毎年夏に学生がお世話になっていきます

福澤 美喜男

私の故郷である高遠から、東京に出て現在勤務している大学の前身であった栄養士養成をする聖徳栄養専門学校に食品学の教員として入職したのが、今から五十二年前であります。専門学校はやがて栄養短大となり、現在は管理栄養士と食品産業の技術者を養成する大学となっております。

話は変わりますが、平成十年に厚労省の「栄養士・管理栄養士あり方検討会」から栄養士と管理栄養士の養成について答申が出され、栄養士の修業年限は二年、管理栄養士の修業年限は四年とすることになったため、他の栄養系の短大も四年制大学にする短大が急増しました。本学でも管理栄養士養成をするため大学設置の申請書類を準備している最中に運悪く理事長が急逝するというアクシデントがあり、当時学長であった私が理事長職を兼務して申請業務を

引き続き行い、平成十六年十一月に大学の設置認可を受け、翌年四月に東京聖栄大学が開学致しました。その後八十才で学長を辞任し、現在は理事長として勤務しています。

本学と伊那市の結びつきは古く、白鳥市長さんがまだ副市長の頃、食品学科の学生が夏休み期間中に行う、二泊三日のフィールド研修を長谷の仙流荘で行ったのが最初であり、その後は高遠さくらホテルで行っています。





研修の内容は農作業や工場見学等であり、農作業はホテルの裏にある借りた畑で作っている野菜の手入れや収穫等を行うほか、伊那食品や養命酒の工場見学、ソバ打ち体験、地元のご婦人から「おやきの作り方」なども習うほか、夜は普段聞けない先生方の話を聞く等のスケジュールが組まれています。その結果研修後は学生がより積極的に行動するようにするため、毎年研修を行っている訳です。

今後とも本学の学生が伊那市におじやましますので宜しくお願い致します。

(東京聖栄大学理事長)

環境過敏症は、現代人なら、誰がいつ発症してもおかしくない健康障害では？

北條 祥子

私は、伊那北高校から東北大学医学部薬学科に進学し、卒業後東北大学歯学部で二十五年間、尚絅学院大学で十八年間教育研究に従事し、東日本大震災の年の三月、六十七才で定年退職しました。当初、定年退職後は、四人の孫の世話をしながら主人とゆっくりした時間を過ごそうと考えていましたが、仮設住宅では、シックハウス症候群、児童虐待、子どもの精神疾患が増えている状況を知り、研究者として何か役立つことすべきとの想いに至りました。そこで、早稲田大学応用脳科学研究所の招聘研究員として、退職金の一部を寄付して「生活環境と健康研究会」を立ち上げて、ライフワークの“**環境過敏症（環境不耐症）**”の研究を再開

しています。

“**環境過敏症**”とは、普通の人は何でもないような、身の周りの生物的要因（カビ・ダニ・花粉等）、化学的要因（タバコ煙・殺虫剤・芳香剤等）、物理的要因（光・音・電磁場）により、多臓器に多彩な症状が出る健康障害と定義されています。これらには、アレルギー疾患、シックハウス症候群、化学物質過敏症、電磁過敏症が含まれ、それぞれの発症には密接な相互関係があり、発達段階の子どもは大人より環境要因の影響を受けやすいです。筆者も、①子どもや何らかのアレルギー疾患のある人は、新築・リフォーム住宅入居後にシックハウス症候群を発症しやすい。②シックハウス症候群の段階で適切な住環境改善ができれば症状は治癒・軽減するが、放置すると建材以外のいろいろな化学物質（タバコ、香料、殺虫剤・防虫剤、柔軟剤など）に過敏反応を示す化学物質過

敏症に移行してしまう。③化学物質過敏症患者の六十%以上は、家電製品、携帯電話（含スマホ）、パソコン、携帯基地局、高圧送電線、無線ランなどの様々な電磁波発生源にも過敏反応を示す電磁過敏症の症状を示すことを報告しています。

アレルギー疾患やシックハウス症候群では、発症と環境要因との関係がある程度、科学的に明らかになりつつありますが、**化学物質過敏症と電磁過敏症**については、発症のメカニズムや診断方法も確立していない現状であり、医療関係者の間でも十分認知はされていません。特に**電磁過敏症**は、患者が症状発現要因と訴える電磁場発生源は、波長・周波数・電磁強度の異なる広範囲に及ぶため、発症要因との因果関係については否定的な議論も多く、世界的にも研究は、ようやく、スタートライン段階といえます。

私は、現役時代、厚生労働

省の“シックハウス症候群の診断・治療法及び具体的対応方策に関する研究班”等で、二十五年間、疫学研究をしてきた経験から、“**環境過敏症**”は、現代人なら誰が、いつ、発症してもおかしくない健康障害であり、このままの経済・利便ファーストの生活スタイルをとり続けるなら、アレルギー疾患と同様に、他の過敏症患者も、いずれ、急増するのではないかと危惧しています。特に発達段階の子ども、脳の神経系への影響（多動、学習障害、自閉症、キレるなど）を危惧しています。

“**環境過敏症**”の対応は、その背景の多様性と広範囲性から、ある分野の研究者だけで背負えるものではなく、専門を超えた研究者が結集し英知を出し合って、発症の仕組み、診断・治療法・予防法及び具体的対応策を検討し、早目に予防的な対策を講ずれば、発症を未然に防げるのではないかと考えて、研究に取り組

んでいます。私が代表の早稲田大学応用脳科学研究所「生活環境と健康研究会」は、現在、六十七名の専門分野の異なる研究者(医師・歯科医師、看護師、疫学、免疫学、遺伝学、薬学、建築学、工学、化学、生物学、物理学、社会科学)で構成しているのもそのためです。

しかし、経済ファーストになりがちな大きな流れの中で、この種の研究は研究費がつきにくい上に、短期間では成果がでにくいため、取り組む研究者がなかなか増えません。また、研究の性格上、社会の中で、利害を発生する側面からくる雑音に悩まされたりもします。気持だけがあせって空回りし、弱気になってしまいうことも多いです。このような時、机の前の伊那の田園風景とその背後に雄々しくそびえ立つ山々の写真をながめ、家族や故郷の友人に長電話をしています。故郷は、いくら年月を重ねても、私に、元氣

をくれるありがたい存在です。
(早稲田大学応用脳科学研究所・生活環境と健康研究会代表)



侘しき老年の日々

丸山 敬一

私が今住んでいるのは、東京の多摩ニュータウン、大阪の千里ニュータウンと並んで日本の三大ニュータウンといわれた名古屋近郊の高蔵寺ニュータウンである。三〇歳の後半、ここに一戸建の家を建てて移って来た時には周囲はまだ空地だらけで、町内会や自治会も結成されていなかった。街灯もなく、夜は鼻をつままれても分らぬ程の暗闇だったので、せめて防犯の

ための照明だけでも点灯しようとして防犯協議会なる組織が結成され、私も一年間その会長を務めたことがあった。仕事は防犯灯が必要と思われる場所を選んで市役所のしかるべき担当者に申請書を提出することであつた。一緒に仕事をする仲間は父親の世代と思われる四人の老人であつた。七〇歳台ぐらいだったろうか。退職して悠々自適の日々と見受けた。

私が仕事で一年間日本を留守にして帰って来てみると、その中の一老人が亡くなつていた。続いて二老人が相次いで亡くなった。残った一老人が奥さんと散歩している所に、その後ばったり出会うと、「寂しいよ！ 皆んな死んでしまつて！」と嘆いていた。ところが運命は非情にも、その奥さんをも彼から奪つてしまった。全く一人になつてしまった彼は東京に嫁いでいる娘さんの所に引き取られて行つたということであつた。

当時四〇歳ぐらいだった私には伴侶を喪つたということがどんなに寂しい事であるか、よく分つていなかった。しかし、同じ事が私にも起つた。三年前妻が癌で七三歳で旅立ってしまったのである。日常の家事などすべて妻に任せきりだった私は、すぐに日々の暮しに不自由することになった。話し相手のいなくなった事も、バカ話好きの私には堪えがたきことである。

高蔵寺ニュータウンも御多分にもれず、少子・高齢化の影響を受け、空家も増え、子供達のにぎやかな声も絶えて寂しくなりつつある。友人をすべて喪い、妻をも喪つた四〇年前のあの老人の事を、今でも時々思い出している。

(中京大学名誉教授・法学博士)

前向き、人生の

三沢 あけみ

まだまだ冷込む毎日ですが、お元気ですか？

私の生まれ故郷、伊那の白鳥市長さまに昨年お願いして実現した高遠さくらホテル内の展示、新曲「高遠さくら」新曲発表キャンペーン城址公園、そして二月四日には、ホテルのデザイナーショーと、市長さまはじめ市の皆さま、地元の方々は、大変お世話になりました。私の念願の思いを伊那でやりとげる事が出来ました。

赤いもうせんに今までの歌手人生で獲得したトロフィー、盾、思い出の衣装、写真と百点近く飾らせていただきました。展示場の前へ立つと、一つ一つの思い出に全国のファンの皆さま、そしてがんばった自分、応援して下さったスタッフ等、走馬灯の様に走り、感無量でございました。

ほんとうにほんとうにあり



がとうございました。

私の演歌情報番組「三沢あけみのお茶会歌謡界」毎週水曜日午前五時半〜六時BS十二では、伊那高遠をPR出来た事も幸せに思っております。展示品は、この後「島のブルース」歌のふるさと奄美大島のビックマリン奄美ホテルで引きうけて下さる事になり、ミニ記念館を設置していただける事になりました。又、旅行の折にでもお立ち寄りいただければ幸いです。

私も、今年は歌手生活五十五年。又、精一杯ガンバリます。

実は、ここ三年程、乳ガンと戦いつづけておりましたが、何とかやっと元気を取りもどして参りました。そんな風には見えないでしょ？

どうぞふる里の皆さまも十分御自愛下さいませ。ほんとうにありがとうございます。これで終る訳ではありません。ん！から、又、どこかでお逢い出来る日までネ。

(歌手)

老後の不安 0.5%の町

三沢 節夫

元日の朝日新聞に伊那市に關係するニュースが載っていた。昨年末、享樂のメッカ「カジノ」をもつリゾートの整備を政府に促す「カジノ解禁法」が、国会で十分に審議されることなく、自民・公明・維新らの議員によって可決成立した。これに対して伊那市議会では、ギャンブル依存症の増加と審議の短さを指摘して「国会が混乱の中で成立したことは大変残念である」という意見書を可決した。できれば、岩手県議会や同県住田町議会のように「法の廃止を求める」意見書を可決して欲しかった。それでも、伊那市は人間の良識を信じる人びとが多く住んでいる土地であることを実感した。

日本にカジノをつくることは、前から一部の人たちが主張していた。今回、安倍首相がシンガポールのカジノを見学して「カジノは日本の成長戦略の目玉になる」と発言し

たことから、推進の動きが加速した。しかし、カジノが経済成長の目玉になるという夢想を信じるひとはあまりいない。アベノミクスでは、株価が上がり、業績を増やした企業も一部にはある。しかし、国全体の消費は増えていないから、一般の庶民はアベノミクスの恩恵を全く受けていない。深刻なのは、収入の少ない階層である。アベノミクスで労働人口が増えたのは、専ら、非正規雇用者によるものである。非正規が総労働人口の40%以上を占めていて、厚生労働省の調査によると、そのなかの60%以上のひとが生活が苦しいと答えている。これは、日本では、四世帯のうち一世帯が生活に苦しんでいることを示している。また、別の調査では、六人のうち一人の子供が貧困の階層に入っている。いわゆる文明国で子供の貧困率が高いのは日本とアメリカである。

日本では96%がイエスと答えているという。別の調査では96%が86%になっている。老後の考え方が両国ではちがうかもしれないが、96と0.5のちがいは深刻である。日本では、今、下流老人という言葉が流行語になっている。日本人の平均寿命は世界で最も高い所にランクされているが、下流老人が増え続けることは悲しいことである。

日本が国全体で96%を0.5%に近づけることはできるのだろうか。それは、今の国会における党派と議員の活動状況をみると、殆んど絶望的であると私は思う。逆に、その希望がもてるのは地方の一小都市とか山のなかの小さい村である。たとえば、伊那市がそれを目指したとしよう。市は土地を選んで超多目的施設をつくる。そこは相互支援と友好の精神で運営される共同住宅で、ひとりで生活できる人とできない人の集合体である。動けるときは人を助け、動けなくなったら人に助けてもらう。なかには病院もあり、小ホールがあつて、

外から子供から大人までやってきて絶えず音楽会などが開ける。料理・手芸・工芸などの趣味をもつ人はその技を皆のために披露する。ここは皆んなで、生きていくことの楽しさとほろ苦さを共感する場所である。

こんなユートピア社会が実現できたらいいなというのが2017年の私の初夢です。

(日本大学名誉教授)



新しいアメリカの誕生

三沢 満



この一月に就任したトランプ大統領の登場は、米国新時代の到来を予告している。

大方の予想を裏切つての当選であつたが、その背景には時代の流れがあつた。彼の、「America First」, 「Make America Great Again」, 「アメリカ第一」, 「強いアメリカの再現」の主張は、多くのアメリカ人の共感を呼んだ。特に若者達がこれに熱狂した。大学内で、若者達の、この反応を察知していた筆者は、すでに夏の時点でトランプの勝利を予測していた。

流れは、自国優先主義であり、保護主義である。国際協調より、自国の利益を優先する主義主張である。これは、米国内に留まらない。すでに英国は、最近EU（欧州連合）を離脱した。これで、かつての大英帝国は、Great Britainから Small Scotland になり下がつたと揶揄されている。

簡単にいえば、米国も英国も自国のことに精一杯で、もう他国のことは面倒みられませんと宣言したことになる。

これの日本に意味するところは多大だ。戦後の日本経済の成長は、自動車、電機製品他、日本品の輸出を寛容に受

け入れてきた米国市場の存在があつたことだ。そのため、日本の自動車や米国内を闊歩し、かの大企業のGM、Fordのbig threeの廃退振りは目を覆うばかり。かつての自動車王国デトロイトは今や失業者があふれ、dead town となっている。彼らからすれば、日本憎しの気持ちは当然だ。

「日本や中国からの輸入品には、関税をかけ、円安、円高を是正し、これらの輸入品の乱入を防ぎ、自国の産業を守り、自国の雇用を優先する」とのトランプの主張に、拍手喝采した人々の票が、彼の劇的な当選に繋がった。

「日本の防衛は日本が自身でやるべき。米国に頼るなら、費用は全て日本負担で」とのトランプの主張には、共鳴する米国人は多い。日本と言うGDP世界第三位の大国がその防衛を他国に依存していいのかとの本質的疑問を、日本人自身が真摯に考えなおす時期に来ているのかもしれない。少なくとも、このトランプの主張は、これを直球として日本に投げ込んだ訳だ。

戦後七十二年後の現在も、日本の戦後はまだ終わっていない。

アメリカは大きく変貌してゆく。日本もこれを如何に受け止め、対応して行くのか、今、我々一人一人が日本の将来を真剣に考える時だ。

（ハワイ大学経営学部大学院教授



セレンディピティ・シテイ伊那市

山北 一司

文化芸術に関わるようになってから今年で十四年になるうとしています。恐らく芸術に関わっている人から見れば短い期間だと思えます。私の場合は、常に地域における文化芸術と生きがいを探索してきましたので、アーティストとは違います。

今回はこれまでの経験を伊那市への思いに重ねてみたいと思います。

多くの都市に住み、暮らしてきましたがその土地土地で地域に根ざした文化芸術が根付いています。その文化芸術を支えている人は間違いなく地域の人々です。高齢化社会の中で、人々が生きがいを持つて取り組む文化芸術（音楽・美術・書道・演劇・舞踊など）、伝統芸能、郷土芸能などが人々の生きる力を与えてくれます。

この際、芸術活動、生涯学習など言葉の壁を取り除きましよう。人が生きがいとして取り組めるものがあれば、幸せなのかもしれません。幸々な日々をおくること、つまり生きる喜びを感じることができる。それが長寿命化につながることを感じた地域は、伊那市において他にはありません。

何故でしょうか？答えは簡単ではありません。単なる経験則、個人的な見解と言えはそれまででしょう。

しかし、参考になるかもしれませんが、伊那市に住んでいたとき私が「セレンディピティ」（偶然の出会い・発見）に何度も遭遇したことに何か特別な意味があるのではないだろうかと考えています。「セレンディピティ・シテイ伊那市」というイメージが今持つて頭から離れません。

伊那を離れて三年位経ちますが、深く交流が続いている方が何人もおられます。そのことも、イメージ連鎖を活発にしてくれます。

昨年初、初めて小説を書いてみました。まちづくりに関するモデル都市を舞台に展開する小説でした。その際も構想の奥には伊那市がありました。いずれ、伊那市を舞台に何か書けたらという（これは初夢？）思いがいつか実現する日が来ることを私自身が一番待ち望んでいます。

（芸術文化普及研究家・生涯学習上級コーディネーター）

